

沖縄におけるリュウゼツランの繊維についての考察、 ならびに簡易取得法

A study for the fiber of agave in Okinawa and a new simple method to take fiber of agave

又吉 光邦
Mitsukuni Matayoshi

【要 約】

本論文では、リュウゼツランがトゥンビヤンと呼称されるようになった経緯について新しい知見をもとに考察を述べる。その後、家庭でもできるリュウゼツランの繊維の簡単取得法について提案する。リュウゼツランの繊維を伝統的な手法で取り出すのは容易ではない。なぜなら、繊維を取り出す際に発生する葉肉の腐敗臭がひどいため、場所や周辺に配慮をしなければならないからである。提案の方法では、匂いも少なく、2週間ほどで繊維を取り出すことが可能であり、かつ同様の方法でサンニン（月桃）やトゥラヌウジュー（サンスベリア）の繊維を取り出すこともできる。

【Abstract】

In this paper, how Agave(*Dugai*) came to be known as *Tonbyan* is discussed, based on new findings. After that, a simple method for obtaining the fibers of agave that can be done at home is proposed. It is not easy to get agave fibers using traditional ways because of the smell of decomposing leaf meat generated when extracting the fiber that is so terrible. Therefore, it is necessary to give consideration to the location and surroundings. The proposed method can get the fiber in about two weeks and has less odor. By using proposed method, the fibers of *Sannin* (shell ginger) and *Turanojyu*(*Sansevieria*) can be also obtained.

【目 次】

はじめに	3.2 リュウゼツランの新しい布
1. リュウゼツランの名前	4. リュウゼツラン繊維取得の困難さ
1.1 ロウガイとトゥンビヤン	4.1 繊維の簡易取得法
1.2 絵葉書に見る「龍舌蘭」	4.2 簡易取得法
1.3 蘆薈	4.3 繊維取得の実践
2. トゥンビヤン	4.4 注意事項
2.1 呼称「トゥンビヤン」とは	4.5 繊維での織り
2.2 その他のリュウゼツランの名前	4.6 繊維の染色
2.3 「桐板」は「とんひやん」	5. サンニンとトゥラヌウジューの繊維
2.4 トゥンビヤン≠リュウゼツラン	6. まとめ
2.5 唐苧	謝辞
3. リュウゼツランの布／服	参考文献
3.1 リュウゼツランの古い布／服	

はじめに

本論文では、まず、リュウゼツランから繊維を取り出す報告をする前に、「リュウゼツラン」、「トゥンビャン」、そして「桐板」等の名称について、著者の考えを新しく知り得た情報を基に紹介する。

次に、文部科学省研究助成費（16K02101）による調査と研究において著者自身が発案した、リュウゼツランの繊維を家庭で簡単に取得するための方法について写真を用いて説明する。本論文を参考にリュウゼツランの繊維を用いた伝統工芸品の製作が行われることを期待したい。

リュウゼツラン¹の繊維は、例えば沖縄の古くて新しい材料を用いた衣服として用いることができ、小物などの副産物を造ることも可能なので、沖縄の観光資源として、観光産業や染織産業に貢献すると考えられる。

1. リュウゼツランの名前

1.1 ロウガイとトゥンビャン

龍舌蘭という漢字名は、戦前の沖縄の絵葉書でよく見かける名前だが、それは学術名を漢字で表記したものである。首里や石垣では、ロウガイ²と呼称されていたようで、現在のアロエも同様にロウガイと呼称していたことは何度も沖縄島や石垣島で聞いた。実際、調査で「アロエの大きいのです」と言うと、すぐにリュウゼツランのことを想起し「ロウガイな？」と語った方もいた。むしろ、リュウゼツランやトゥンビャンという名前を知らない方がおられたのも事実である。

現在でもロウガイという名称が年配の

方々にあることを考えると、琉球王朝時代において、リュウゼツランやリュウゼツランから取れる繊維のことをトゥンビャンと呼称したとは正直なところ考えにくい。

1.2 絵葉書に見る「龍舌蘭」

図1、図2は琉球の植物として紹介されているリュウゼツランである。それぞれ戦前の絵葉書で、図1は少なくとも1940（昭和15）年頃³のもので、「龍舌蘭」と紹介している。付け加えれば、著者の持つもう一枚の昭和15年8月10日のスタンプのある彩色絵葉書も「龍舌蘭」と記している。



図1 龍舌蘭

ところで、図1のリュウゼツランは、石垣の上に数十メートルも群生しているが、著者も1975年頃の記憶として、沖縄島の海岸沿いに群生していたのを記憶している。今は、首里城周辺地域にわずかに残るだけである。いつの頃からか分からないが、沖縄島から一斉に除去された感を受ける。

図2は1903（明治36）年に開業した小澤朝蔵⁴が開業した博愛堂発行の絵葉書で、図3はその拡大である。

1 いくつかの種類があるが、本論文では「リュウゼツラン」と一括りで記す。

2 「ロウガイ」の「ロ」音は、濁音が混じり、「ド」と「ロ」の中間的な音である。

3 文章を記す面には、「CARTE POSTALE」とあり、同じ発行所の「龍舌蘭」の彩色絵葉書には、昭和15年のスタンプが押されていることから、この絵葉書は1940年以前のもので推定した。

4 博愛堂：小澤朝蔵。茨城県行方郡香澄村の人、1870（明治3）年生。1903（明治36）年開業。1914（大正3）年、那覇区市議（文献 [1]）。



図2 博愛堂の絵葉書



図3 ログワイ (拡大図)

この絵葉書は、1925 (大正14) 年頃迄⁵のものと考えられ、リュウゼツランの事を「ログワイ」と古老から聞く呼び名で明記している点で非常に貴重である。

5 著者の調べた範囲だが、博愛堂出版の最後の書籍は1925 (大正14) 年10月20日出版の『琉球』(文献 [2]) なので、そこ頃までの絵葉書とした。1929 (昭和4) 年想定文献 [3] では「小沢書店跡」と記されている。ところで、『琉球』のp.71にも龍舌蘭の名と共にその写真が掲載されている。

ところで、沖縄を訪れたペリー提督は「the gardens of the natives commenced, divided from each other by coral walls and bristling hedges of yucca and cactus. (珊瑚の壁とリュウゼツランとサボテンのもじかもじました生垣で仕切られた住民の庭園が始まった。)」(文献 [4], p.156。訳は著者) と記しているが、cactusは図3のログワイの奥にあるフクロギ (仙人掌: サボテン)⁶ であり、yuccaはリュウゼツラン科イトラン属なので、手前の巨大化したアロエと例えられるリュウゼツラン、すなわちロウガイとなる。

余談だが、図2に示した博愛堂の絵葉書の構図は、ペリー提督の記述を裏付ける、いわば沖縄の実際の様子を示す、非常に良い資料と言えるであろう。もしかしたら、博愛堂はペリー提督の記述を知っていたのかもしれないと考えると面白い。

さて、本題に戻ると、図1～図3に示した戦前の古い2つの絵葉書は、いずれもリュウゼツランのことをトゥンビヤンと記していない。つまり、少なくとも博愛堂のある那覇、さらには沖縄島やその他の多くの地域でも、大正年間まではリュウゼツランのことをロウガイ (微妙に異なる発音があるが、本論文ではロウガイと記す) と呼称していたと考えるべきであろう。

1.3 蘆薈

「蘆薈」そのものは、アフリカ原産のアロエ⁷を指すとされ、形状の類似性から龍舌蘭の呼称となったと思われる (文献

6 多和田は文献 [5] (p.150) で、「cactus—仙人掌 (実は蘆薈)」としているが、蘆薈はアロエなので形状的にサボテンには当てはまらない。

7 沖縄には2種類のアロエがある。どちらもロウガイと呼称する。一つはやや細長く、もう一つは平たい。細長いものは胃薬に近く、磨り潰して飲む。もう一つの平たいものは、真ん中で割って、内側の面をシップのようにして火傷の箇所当て。この二つのアロエ使

[7]、p.449) ことは、自然なことのように思う。リュウゼツランを説明するとき「アロエの大きい」と言うのと相手に通じるのもその特徴的な外見が似ているからで、アロエとリュウゼツランをまとめてロウガイと呼称していたと聞くこともあった。

「蘆薈」の漢文字は、清国の档案文書(公文書)の中に見つけることができる。乾隆三十九年正月初八日(1774年2月18日)、福州將軍薩哈岱、進貢船の歸國および貨物の免税措置(文献[8]、p.7)についての報告で「蘆薈二百斤 税銀二兩四錢」と頭號船(文献[9]、p.250)ならびに2号船(文献[9]、p.260)にそれぞれ記載がある。沖縄に戻る船に搭載されたこの「蘆薈」は、いわゆるアロエなのかそれともリュウゼツランなのか判然としないが、いずれにせよ「蘆薈」というモノと言葉が、少なくとも1774年に伝わって来たことは分かる。もしかしたら初めて沖縄にもたらされた「蘆薈」なのかもしれない。

実際、あれだけ容姿にインパクトのある白い繊維の取れるリュウゼツランについての記述が、『中山伝信録』⁸(文献[11]、pp.453-458)や『質問本草』⁹にない。葉に同様の鋸状の棘のある阿檀については、両著にしっかり記されているにもかかわらず

用法については、70代の平安座出身の伯母T.Nさんと小浜島出身のN.Oさんも同じ説明をされた。私個人も、平たいアロエを火傷に使ったことを覚えている。また著者の母N.Mは、アロエを泡盛に浸けて育毛剤にしていたと話してくれた。また、私が風邪を患ったときに胸や額に貼って使ったとも言っていた。さらに、打ち身や捻挫にシップのようにして貼ると、青あざにならなかったとも語っていた。当時、とても便利な薬草だったそうである。ところで、鳩間方言辞典(文献[6]、p.1807)にもアロエを「ルガイ【rugai】」と記している。

8 冊封副使の徐葆光による琉球王朝期の地誌。全6巻。1719年6月～1720年2月まで滞在(文献[10]、p.783)。

9 呉継志の著。薩摩・屋久・トカラ・琉球諸島などに産する草木の名称・薬効について、1785年から5年間に渡って尋ね、記したもの。収録草木の数は160種。(文献[12]、p.311)

である。

二つの書籍の成立年から考えると、仮にこの「蘆薈」がリュウゼツランなら、1774年以前の沖縄にリュウゼツランは無かった可能性が高いと考えてもよいことになる。

2. トウンビャン

2.1 呼称トウンビャンとは

那覇でリュウゼツランをロウガイと呼んでいたのは事実なので、リュウゼツランをトウンビャンと呼ぶことについては、実に慎重にならなければならない。なぜなら、次の仮説3でも述べるが、トウンビャンは「桐板」と記された、中国からの輸入品だからである(文献[13]-[16])。

それでは、なぜロウガイと俗称のあるリュウゼツラン、あるいはその繊維のことをトウンビャンと呼ぶようになったのか、それが問題となる。

そこで、著者は次の3つの仮説を立て、検証することにした。

一つ目の仮説1は「ある場所の呼び方が沖縄中に広がった」である。

二つ目の仮説2は、本来、中国産の麻系の「桐板」を「トウンビャン」と呼称するのが正しいが、リュウゼツランを「トウンビャン」としていつの間にか扱うようになった。

三つ目の仮説3は、誰かがリュウゼツランあるいはリュウゼツランの繊維のことをトウンビャン(桐板)と発信してそれが世に広がった。

以下、一つ一つの仮説について、簡単に論じてみたい。

一つ目の仮説1は、桐板織りの本場は首里¹⁰なので、その呼び名が広まったとの考えが穏当かと思ったが、士族が名誉ある

10 首里区の機業奨励組合の記事に首里区は、紬、芭蕉

褒賞品の桐板とロウガイを混同することはないだろうと考えると支持できない。実際、首里では少なくとも1979年まで、古老はロウガイと呼称している(文献[18]、p.208)ことを忘れてはならない。また、後に示す表1から、宮古や与論以北から広まったと考えるのは、桐板が輸入による褒賞品で、織りの本場が首里であることを無視しているので、受け入れられない。

二つ目の仮説2は、呼称の置き換えが「いつの間にか」起こったと考えるものだが、これは仮説3を説明することで明らかになる(仮説3の後に述べる)。

最後の仮説3だが、実は、著者はこれが最も腑に落ちている。その「誰か」とは、沖縄の織物を研究した田中俊雄¹¹である。そこで仮説3について、詳しく述べてみたい。

多和田真淳は文献[5]で「桐板とは何かを明記した」(p.136-146)書物を調べ上げた。その中で一番古い書籍が1952年に出版された田中俊雄の『沖縄織物裂地の研究』(文献[19])である。書籍の中では、ほぼ同じ文言で「桐板(トゥンビアン)と呼ばれている竜舌蘭の一種の繊維」と計3箇所¹²で記している。田中は民芸の一行と1939(昭和14)年に沖縄各地を回り¹³、織物を入念に調べ、沖縄の織物を語る上でバイブルとも言える先述した書を残した¹⁴。

布、桐板織物等を多く産し同区の婦女ハ殆んど機織を持って専業とする程」と記され、かつ「首里は琉球手引紬、同芭蕉布、同桐板布、紋織、風通織の製造本場なり」(明治34年12月13日)と力強く宣言している(文献[17]、p.100)。また、実際、廃藩置県後に士族が移住した与那国島は、明治35年8月7日の琉球新報で「(略)細上布トゥンビアン等を蔵する者さへ尠からすと云う」(文献[17]、p.128)とある。

11 田中俊雄(1914-1953)は、山形県米沢市生まれ。1939(昭和14)年の日本民藝協会の沖縄調査団に同行し、調査研究成果を著作等で積極的に発表した。

12 「沖縄織物裂地の研究」が収録されている『沖縄織物の研究』(文献[19])においては、p.6、p.17、p.31。

13 1939(昭和14)年から3回、沖縄を調査している(文献[22]、p.22)。

そして積極的に博物館などへの寄贈も行っている。

当時、既に1934年11月発行の『増補 染織辞典』に「トンピヤン-ふ(桐板布)(略)原料は麻糸に類似せる色白き硬質繊維にて、(略)支那福州地方より輸入す」(文献[20]、p.571)があったし、それ以前に、佐喜真興英の1925(大正14)年の著、宜野湾市新城の「シマの話」¹⁵で「芭蕉布の外にTumban布を着たが、之は外来の材料で拵へられ、島では多く用ひられなかった。」(文献[21]、p.271)等の記述もあった。特に、佐喜真の「シマの話」の記述はとても大切で、Tumban布は輸入品であり、リュウゼツランの繊維で織られた布ではないと、那覇から離れた宜野湾新城の地域でも認識されていたことを示す。

つまり、明らかに沖縄島においては、桐板布(トゥンビアン布)は、輸入品だったのである。

実は、桐板が中国からの輸入品であったことを田中は知っていた。田中は家譜などの古文書に度々記された「桐板」を無視して、「現代にいたっては、逆に中国から輸入しておりました」(文献[19]、p.6)と記し、あくまでトゥンビアン=リュウゼツランと導くことに執心している。

この『沖縄織物裂地の研究』の出版後、特に沖縄復帰運動が盛んな時期の1966～1972年代の染織、工芸、そして沖縄民俗文化の書物に揃って「桐板=竜舌蘭」の旨で明記¹⁶されるようになる。そのことを考え

14 彼が他界する1年前である。その後、彼の妻が、彼の研究ノート等を編纂し、『沖縄織物裂地の研究』に増補する形で『沖縄織物の研究』を1976年に出版した。事実上、この書は沖縄の織物を語る上で無くてはならない必携の書である。

15 沖縄では古くから、ある小地域のことを島(シマ)と呼ぶ。ワシタシマと言う時は、自分たちの集落のような意味で用いる。

16 文献[5](p.136-146)を参照されたい。

ると、田中俊雄の著書の影響は決して小さくない、むしろ計り知れないほど大きかったと考えてよい。

桐板は中国からの輸入品で、戦争の動乱で輸入が途絶えた（文献 [5]、p.139）。戦後の錯綜した時期を経て、アメリカ世の沖縄となり桐板布が完全に幻の布となっていた¹⁷。以前訪れた沖縄は、まさに大変革を迎えていた。推測になるが、そこで田中は「なにか産業態自体からおこってくる真の民藝的な示唆はみいだせないものか」（文献 [22]、p.27）とリュウゼツランの繊維に目を付け、それで織った布を桐板布として積極的に提案したのではないだろうか。

田中は「民藝運動と琉球行」（文献 [22]）の中で「民藝運動とはいわゆる在来の美術界の圏内におこった運動なのである」（同 p.26）、「しかし、今度の「工芸」の作家の琉球行は、この民藝運動の既成の限界を破る意図を持ったものと解することができる。すなわち、前述の美術運動から脱して、一つの沖縄という産業態によびかけるものとして、わたくしは並々ならぬ関心をもって同行した」（同 p.27）と述べていることから分かるように、作家ではない立ち位置から失われていく沖縄の工藝、殊に染織の状況を鑑みて、どうにかして復興できないかと考えていたことは明らかである。そして、その道具として選んだのが、桐板布とリュウゼツランだったのではないだろうか。あれだけ沖縄で織物の調査をした彼が、桐板布に使われている糸の繊維とリュウゼツランの繊維を見間違えることは、あり得

ないであろう¹⁸。

桐板の繊維は、白く硬質である点において、リュウゼツランの繊維と似通った性質を有する。そのため、確かに取り違えと考えることもできるが、むしろそこに、田中は「産業態によびかける」（文献 [22]、p.27）可能性を秘めた「もの」として目を付けたと考える方がしっくりくる。

仮に、田中の単なる見間違いなら、その誤解の始まりは「トゥンビヤン（略）、これは「唐苧・桐板斎」などとするされて後世の沖縄の文献に散見する、リュウゼツランの繊維で、先島ではトープー [=唐苧] とよび」（文献 [19]、p.75）の記述からとなるだろう。

しかしながら、それでもやはり、敢えて言わなければならないが、その後の沖縄の染織の書や研究に影響を与え、リュウゼツランが桐板（トゥンビヤン）であると強烈に沖縄の世に広めた事には変わりはない。（「唐苧」は、第2.2節を参照）。

この仮説3を念頭に、再び仮説2について考えてみたい。つまり仮説2は、仮説1を念頭に、仮説3により起こされたと思えると筋が通るので受け入れやすい。

仮説1において、首里ではリュウゼツランをロウガイと呼称していることを紹介した。つまり、トゥンビヤン（桐板）とリュウゼツランは首里では明らかに違う物である。そのことを念頭に次の表1を見て頂きたい。

表1に示したのは、1979年出版の天野鉄夫¹⁹の『琉球列島 植物方言集』（文献 [18]、pp.207-208）からリュウゼツランの呼び

17 「その作りたてを禁止する法令」として「道光二十七年未年今帰仁間切御訴控書」（文献 [23]、p.40-41）を挙げているが、これは「唐苧」を普通の耕作地に植えてはいけない禁止令であって、富山・大野が言う「奢修禁止令」（文献 [24]、p.97）ではない。

18 著者が2021年5月23日、日本民藝館の桐板布を裸眼で見たとこ、硬質の麻糸のようであった。明らかにリュウゼツランの繊維と異なっているように見えた。田中が、桐板布の繊維とリュウゼツランの繊維を取り違えるだろうか。

19 昭和10年から各地の植物の呼び名の採録を始める。

名を地域ごとでまとめたものである。

表1 リュウゼツランの呼称

首里	ルグワイ、ロクワイ
八重山	ルグワイ、ルーガイ、ルガイ、トゥガイ、ブーカイ、トープ、トブ
宮古	トゥンバン、トゥンベン、トゥンビン、トンビヤン、トンベン、ヤマトゥンギ
与論 永良部	トゥンバン、トゥンビヤン、トンビヤン、トンピヤン、トンピヤン、トアダニ、トアダネ、トアダニ、トアダン、ウサギヌミ

注)「桐板」、「蘆薈」の発音は太字とした。

表1を見ると、桐板織りの中心地であった首里で別物として扱われていたものが、地方に行くとトンビヤンとして扱われる現象が現れることがわかる。

具体的に言えば、首里と八重山にロウガイがあり、トゥンビヤンの呼称がない。一方、宮古と与論以北にトゥンビヤンがあるが、逆にロウガイの呼称がないことが分かる。この違いが、仮説3に示したトゥンビヤンとはリュウゼツランの繊維だとして発信したことにより引き起こされたと捉えると受け入れやすい。

八重山にトンビヤンが無いのは、1886(明治19)年頃、田代安定が「八重山群島米國蘆薈繁殖予算書」に記したように、八重山(石垣島、西表島、竹富島、小浜島、新城島)において蘆薈の繊維で産業を促しており(文献[5]、pp.147-150)、その影響もあってロウガイの呼称が不動²⁰となってい

老を訪ね、あるいは「実物を示し」て収集した「植物方言」である。「古来から語り伝えられてきた植物方言の多くは消滅の危機に瀕している」との危機感から書にまとめ上げた。

20 歴史家の御教授を賜りたいが、八重山には琉球王朝時代の士族が多く流入したと聞くことがある。もし流入した多くの士族が首里や那覇の出身なら、リュウゼツランはロウガイであり、褒賞品の桐板になり得なかったのは当然と考えることもできる。

たと考えられ、そのため、織りの「産業態」によびかけるもの(文献[22]、p.27)の代名詞のトゥンビヤンに成り得なかった。しかしながら、宮古と与論以北においては、トゥンビヤンの呼び名が戦後の伝統染織産業復興の一つの担い手として、あたかもブランド名のように受け入れられ、定着していったと考えられる。

その後も現在進行形で“幻の”と冠されるトゥンビヤン布は、知名度を上げ、それに従いトゥンビヤンはリュウゼツランの方言であるとして、ロウガイと呼んでいた首里やトープと呼称していた竹富にまで根付いてしまった²¹。

まさに、呼称の置き換えが、時間をかけて「いつの間にか」、そして確実に起っていたのである。

2.2 その他のリュウゼツランの名前

八重山に、トープ(竹富)、トブ(石垣、与那国)の別名がある。八重山での別名は、おそらく「唐」の「トー」に「苧」の「ブ」が繋がった名称であろう。一方、与論以北ではトアダニ(永良部、与論)、トアダネ(奄大:笠利)、トアダン(奄大:大和)、トアダネイ(喜界)であるが、これらの別名は1981年再版の『奄美方言分類辞典 上巻』(文献[26]、pp.824-825)にある通り、「唐」の「トー」に「阿檀」の「アダン」が付いた名称と言える。

勝手な推察だが、確かにアダンの葉にはリュウゼツランの葉と同じように鋸状の棘が付いているので、両者の混同を避ける必要がある。そこで、パイナップルのような

21 前新透の『竹富方言辞典』(2011年2月出版)(文献[25]、p.719)では、リュウゼツランの方言をトゥンビヤンと記し、かつ「石垣方言、首里方言ともにトゥンビヤン」と記している。辞書の上でもロウガイという呼び名がトゥンビヤンの呼び名に駆逐されたことを示す。

実を付けるアダンと区別して、リュウゼツランには「トー」が付けられたのではないだろうか。

これらの別名を眺めてみると、沖縄島から北と南に離れた地域に「トー」の名を冠して、その地域の呼び名が付いていることがわかる。言い換えれば、これら「トー」を冠した名前が、その地域にあったリュウゼツランの本来の呼称であった可能性が高い。

そう考えると、細かい音の違いを気にせずに記せば、八重山では「トーブ²²」(⇒「ロウガイ」)⇒「トゥンビヤン」と変遷し、与論以北では「トーアダン」⇒「トゥンビヤン」と変遷したと考えてよさそうである²³。

2.3 「桐板」は「とんひやん」

トゥンビヤンの漢字名は、一般的に「桐板」が充てられるが、その他に「銅板」等もある。著者の調べた限りでは、琉球王朝時代の琉球の古文書に仮名や片仮名での表記が見出せないため、「桐板」を「トゥンビヤン」に近い発音で呼称していたという確証そのものは、実は著者も持ち合わせていなかった。また、海外貿易調査会は明治33年1月の琉球新報(文献[17]、p.26-28)で「桐板チエー」、「トンヒヤンチエー」と使い分けてもしているので、桐板をトゥンビヤンに近い音で記述するのは、正直なところ躊躇いがあった。

しかしながら最近、「とんひやん」と明

記された1859(安政六)年の古文書が、基昭夫氏の御教授で与論島の猿渡家文書²⁴(文献[28]、p.134)の中にあることを知った。それには、

同<安政六年>十一月十三日 同十二日
一上尺莖九束三枚 一竹筒り壺つ 内細
上布三反 油嶋四反

とんひやん²⁵壺反

右は御調文品々の内として届上置候

(太字・下線は著者)

と記されている。この古文書の記された安政六年は1859年で、琉球王朝時代である。記された「とんひやん」は「御調文品々」で、一緒に記された「細上布」などと共に琉球から求め得たものである可能性を無視できない。そのことを考えると、この「とんひやん」は中国から輸入した「桐板」の音を平仮名で記した可能性が高いと考えるのが穏当で、「桐板」の読み方を知ることができる貴重な古文書となる。

推測となるが、琉球国より買い求めて来たものの「桐板」という漢字名を知らなかったため、音を拾って「とんひやん」と仮名書きしたのではないだろうか。

2.4 トゥンビヤン≠リュウゼツラン

トゥンビヤンはリュウゼツランやその繊維のことではない。学術的にも民間においても名称の混乱が起こったのは、1952年出版の田中の『沖縄織物裂地の研究』からと考えるべきで、それに続く沖縄の染織の書、ならびに研究、さらにはその後の報道などが、残念ながらその力を今も与え続けてい

22 「トーブ」が「唐苧」なら、『雍正十四年 納殿染賃例 大美御殿』(文献[27])にいくつも記載されている「唐苧」を、リュウゼツランの繊維であるとの可能性で論じるのもよい。具体的には、賃銭「老貫五百文」で「唐苧拾貫」のように書かれている。また、『球陽』に唐苧の記載があるが、いずれも八重山での出来事を記していることを付記する(2.5節参照)。

23 その他の「ウサギヌミミ」、「ヤマトウンギ」等があるが、それは話し手の持つ個人的な呼称であろう。

24 日本工業大学特別研究員の基昭夫氏、ならびに与論郷土史研究会長・与論町文化財保護審議会長の麓才良氏の資料提供による。

25 文献[28](p.134)では、「トゥンビヤンはリュウゼツランの繊維で織られた地元の産の涼しい布地である。」と紹介しているが、本論文で述べていることを考慮に入れると、慎重でありたい。

ると考えてよい。

著者もいくつかの論文等で“幻のトゥンビヤン＝リュウゼツラン”の旨で記してきたが、ここにはっきりと訂正したい。今後は、桐板とリュウゼツランを区別して扱うこととする。

2.5 唐苧

しかしながら、そうするとリュウゼツランの繊維、あるいはそれに酷似した繊維で織られていた布の名称について呼び方が古文書の中にも見当たらない。リュウゼツランの繊維で織られた実物が存在（3.1節参照）するにも関わらずである。

古文書には、八重山に残っていた呼び名の「トープ」に相当する「唐苧」が出てくる。例えば、『球陽』に「(略) 且去年、唐苧出産甚だ少く、調出物・御用布を織るの妨を致す。(略)」(文献 [29], p.292) や「(略) 且今唐苧植うる所の処は、土湿りて乾かず、故に茂盛を致さず、(略)」(文献 [29], p.302) とある。いずれも八重山での出来事を記しているので「唐苧」=「トープ」と考えてよいであろう。また、古文書の唐苧は貢物としての「調出物・御用布」用と記されているので、かなり貴いものと考えてよい。実際、琉球王府機関の納殿の資料『雍正十四年 納殿染賃例 大美御殿』(国宝：尚家文書。以下、納殿染賃例) には、唐苧の記載が複数個所あるが、「納殿」は「主に冠婚葬祭を行った」(文献 [27], p.21) 場所なので、決して安価なものではなかったであろう。また、房付の筵だろうか、「御用物納ヶ所の事」に記された「一下唐苧房筵之類」(文献 [30], p.16) があるが、その近くに「御内原并御殿々々御用之諸物」や「聞得大君御殿佐敷御殿御用の諸反物」等の記載も見えることからしても、唐苧は高貴な物であったと推察できる。

「唐苧房筵」の「筵」は、後述する裙、黒朝衣、そして特に留めの織り方を想起させる(第3.1節参照)。筵のような風合いの織りが唐苧で作られた布の特徴であったかもしれない。

この唐苧がリュウゼツランであると思わせるのは、湿る土地には繁盛しない旨の記述である。図1でもリュウゼツランは石垣の上に群生しているが、メキシコ原産のリュウゼツランが乾燥した土地を好むのは想像に難くない。

八重山の古い呼び名を考えても、織りの手法を見ても、そして植性を見ても、唐苧はリュウゼツランであったとする方が無難だと著者は考えている。

ただ、安易に名称を付けることは避けたい²⁶ので、著者は学術的な名前として適切な名前が出るまでリュウゼツラン布、あるいはリュウゼツランの繊維の布と呼ぶことにしたい。しかしながら、新しい地域のブランド名として、“蘆薈(ロウガイ)布”、“唐苧(トープ)布”、あるいは“唐阿檀(トアアダン)布”と呼称するのは問題ないであろう。

3. リュウゼツランの布／服

実際、リュウゼツランの繊維かそれに酷似した繊維で織られた古い布(以後、簡単のためリュウゼツランと記す)は沖縄に存在する。

3.1 リュウゼツランの古い布／服

著者は次に示す、4点のかなり古い裳、衣、留め、そして古裂の一部が、リュウゼ

26 学術上も沖縄の文化継承の観点でも、使われたことのない用語を用いるべきではないと著者は考えている。例えば、沖縄の多色の型染めは鎌倉芳太郎により「紅型(Bingata)」とされているが、古文書には一切出ない用語である。「形付(カタチキ)」が、歴史的に正しい名称・用語である。

ツランの繊維で織られた布であろうと推定している。そして、おそらくこれが、幻の織物と呼べるものなのではないかと考えている。

図4は2009年8月15日に久米島で調査させて頂いた、あるノロの方の所有されている先々代以前の衣装の一つのスカート(裙:カカン)である。絹のような光沢を放つこの裙は、デジタル顕微鏡で見るとリュウゼツランの繊維に酷似した植物繊維で織られていることがはっきりわかる。

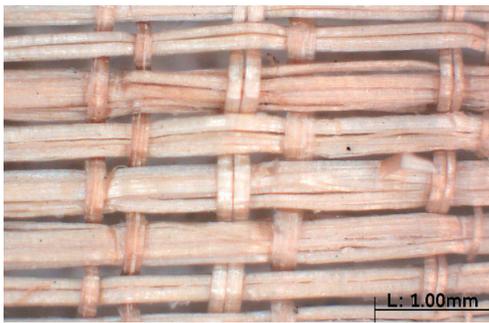


図4 ノロの裙

特徴的なのは、繊維が不透明であることで、これにより芭蕉糸と異なると即断できる。また、苧麻や木綿と異なり、毛羽立ちがない²⁷。

織りの点から見た特徴として、経糸と緯糸の糸密度の明らかな違いがあり、緯糸に比べて経糸はかなり少ない。一見した時、筵のような織物だと自身で呟いたのを覚えている。このような織り方をする理由として考えられるのは、リュウゼツランの繊維を経糸に用いると非常に織りにくいことが挙げられる(これは著者の実体験でもある)。さらに少ない経糸に合わせて緯糸の本数も少なくすると、ガーゼのようになってしまう。それを補うためであろう、緯糸を2本以上束ねて通して布の摩擦に対する堅牢度の強度を上げているように見える。

次に示す図5は、小浜島由来の黒朝衣である。糸の材料や織り方や染めの状態は、石垣島の南嶋民俗資料館にある黒朝衣と同じである。

この黒朝衣の特徴は、一本の糸(繊維)がとにかく細く、しかも、かなり密に織られていることで、織り手の目から見ると、まさに人間離れした織り物であり、感嘆の息しか出ない。

南嶋民俗資料館の黒朝衣については調査の結果、極細の糸芭蕉が使われているとされているとのことだが、経糸と緯糸の糸密度の違いや、緯糸を数本まとめて通していることなどは、図4のノロの裙と同じである。他に見ない特殊な織りの技法であることを考えると、小浜島由来の黒朝衣の材料が久米島のノロの裙と同じ材料であると考えるのは決定的外れではない。また、この黒朝衣は透光性を確認できないほど強く染められているが、基本的に芭蕉は色染めが難しいことはよく知られた事実で、これだけ強く黒に染められていることもまた傍証になり得えよう。

27 富山・大野は「糸のケバ立ちも麻に比較して長い」(文献 [24], p.98)としているが、著者の経験から言えばリュウゼツランの繊維は非常に裂けにくいので、毛羽立ちはほとんど見られない。従って、彼らの言うトゥンビャンは、麻系の繊維で出来た糸と言えよう。



図5 小浜島由来の黒調衣²⁸

さらに著者が注目しているのは、繊維状態である。図5の下段の画像を見ると、一本一本がさらに細い繊維できていることが分かる。また、経糸によって緯糸がやや締め付けられる様子が明らかであり、柔軟さを持っている事も分かる。このような繊維の状態は、ノロの裙と同じと言え、はっきり言えば、芭蕉の繊維の特徴と大きく異なる。また、中央の図の中の右上に見えるように糸の結び方は、非常に小さい固結びの様で、撚り継ぎが難しい繊維であることを示している。

28 小浜島には、明和の大津波の後、琉球王に嫁いでいた姫が御伴とともに帰島した伝説と、それを裏付ける物語となる物が数々ある。この黒朝衣はその時、一緒に来島した随伴した者の黒朝衣かもしれない。

図6は、南嶋民俗資料館に収蔵の経糸密度約30本/cmの芭蕉布の顕微鏡写真だが、図4、図5と明らかに異なることが分かるであろう。



図6 芭蕉（幅2mm：経糸密度30/cm）

ところで、図5の経糸にはリュウゼツランの繊維のような柔らかさをやや感じない。繊維の丸み具合がリュウゼツランと異なるように見える。しかも、一本一本が、細さの割りに適度な堅さと柔軟性を持っている。そのため、もしかしたら経糸は、トゥラヌージュ／トラノオ（学名：サンズベリア）なのかもしれないと著者は考えている（第5節参照）。

次の図7に示すのは、南嶋民俗資料館にある手書き文様のある踊り衣装の留めである²⁹。専門家により極細の糸芭蕉とされると崎原毅館長が語ってくれたが、繊維の束ね方、織り方、繊維の光沢、柔軟性の状態、糸結びなどは、裙や黒朝衣と同じで、まるで筵のような風合いを持っている。見て明らかだが、図6の芭蕉の繊維とは全くの別物と言えよう。

この留めの織りの状態を見ると、『富川親方八重山島諸村公事帳』の「御用布調候唐苧之儀、締ニ而布相調晒候而者艶無之、其上隙を費候故兼而苧晒置相調させ候様下知方可致事（御用布を唐苧で整える場合、締に布を整え晒すと艶が無くなる。そのうえ、隙が出来てしまうので、苧を晒して整

29 2008年3月25日の調査で、スケールを入れた調査をしていなかったのが悔やまれる。改めて調査が必要である。

えさせる様に指示すること)」(文献 [31]、pp. 30-31。意識は著者)を想起せずにはおれない。この古文書は「唐苧」は、糸を晒して後に織れば艶が出ること、そして目の細かい緻密な織りの「絺」の布であることを記しているが、織り上がった布は、まさに図7の留めの様な艶のある布なのではなかったのかと思えてならない。

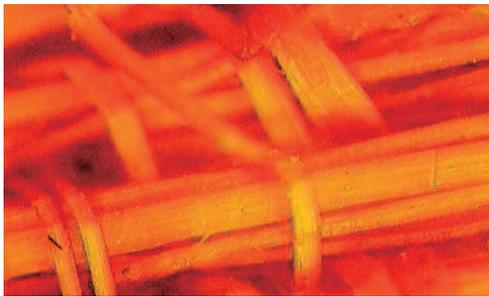


図7 踊り衣装の留め

次の図8に示すのは、2020年3月に石垣市立八重山博物館で調査(科研:16K02101)した際に撮影した、鎌倉芳太郎寄贈の古布裂No.174の顕微鏡写真である。経糸は苧麻だが、古裂の下側の緯糸にリュウゼツランの繊維に酷似したものをを用いていることが分かる。また、緯糸で用いる際、何本かの繊維を束ねている所は、図4の裙、図5の黒朝衣、図7の留めと同じ手法であることにも御留意いただきたい。経年による変色が見られないので、前出の3点よりは新しいものと思われる。

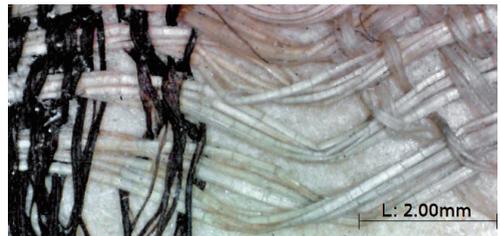


図8 No.174

以上、紹介したこの4つの古い織物は、沖縄県内の他のどこでも見ることのできない、いわゆる“幻の織物”と呼ぶにふさわしいものであろう。

繊維の状態から、いずれもリュウゼツランの繊維に近いものが用いられていることは間違いなく、そればかりか裙、黒朝衣、留めの織りの技法は明らかに同一であり、しかも他に見ない独特なものである。まさに幻の繊維と技法で織られた“幻の布”と呼ぶにふさわしい織物と言えよう。

3.2 リュウゼツランの新しい布

リュウゼツランの繊維での織りがすっかり廃れてしまった訳ではない。これは、田中の功績と言ってもよいだろう。リュウゼツランの繊維を用いた布づくりは、彼の書以降、大きな付加価値を持ったため、廃れずに生き残った。

例えば、文献 [28] には、1920 (大正9) 年生まれの方による、年代的には戦後の話と思われる与論島におけるリュウゼツランの繊維の取り出し方や衣服についての詳しい説明がある³⁰。

また、石垣市伝統工芸館に一反ある（図10参照）。与那国島には見本帳も残っている。与那国島の見本帳には「トゥンビヤン、ゴバン」と名も明記されている³¹が、説明札にはサイザル麻と記されている。

実は、これら3つの布には、経糸に木綿糸、緯糸にリュウゼツランの繊維を用いるという共通点もある（図10参照）。おそらくこのようにして織ると良いという教えが広まっていたのかもしれない。実際、リュウゼツランの繊維は摩擦が少ないため、木綿を経糸に用いて織り易くしていたのであろう。つまり同時に、経糸にリュウゼツランを用いるのが難しいことを示す伝承・物証でもあるのである。

また、図9に示すように、つい最近まで、宮古島では実際にリュウゼツランの繊維で衣装まで作られている（文献 [15]、[32]）。



図9 下地テルさん作（帯は著者）

30 喜如嘉における芭蕉の繊維を取り出す方法に似ている。
31 既に与那国島での呼称「トーブ」が消えていることにご留意頂きたい。

図9の資料を提供して下さった宮古島の下地テル³²さんは、リュウゼツランの繊維を使った布づくりをなされていたので、沖縄県でリュウゼツランの繊維を使った布づくりが、戦後、全く無くなったわけではない。

次に図10に示すのは、石垣市伝統工芸館収蔵のリュウゼツランの布のデジタル顕微鏡画像である。繊維の太さや、撚りで糸を繋ぐのではなく、黒朝衣や留めと同じで、結んで糸を繋いでいることが良くわかる³⁴。この繊維の状態を見ると、撚り結びは難しいであろうことが分かる。また、裾や留めと同様に繊維に光沢があるのも分かる。



図10 「繋ぐ³³」繊維

ここで、図10のデジタル顕微鏡写真と図4、図5のデジタル顕微鏡写真を見比べてすぐに気づくのは、やはり緯糸に使われて

32 大切なリュウゼツランの繊維で自ら織った反物と、それで作った衣装を著者の桐板の講演(2021年6月28日)の前に、わざわざ沖縄国際大学の著者の元まで送って下さった。御礼を申し上げたい、ありがとうございます。
33 宮古島で実際にリュウゼツランの繊維で織った下地テルさんは、おばさんが「繋ぐ」と言っていたと私に教えてくれた。
34 図10に見える繋ぎ目から伸びる繊維は長いですが、それは緯糸として経糸に抑えられているのが分かる。写真は無いが、下地さんの作る繋ぎ目から伸びる繊維も同様の処置がされていた。下地さんはこのことに関して、「ちゃんとしないと、肌に刺さって、ちくちくして痛い」旨を語ってくれた。リュウゼツランの繊維で実際に織った経験者でしか言い得ない発言であろう。

いる繊維の細さの違いであろう。図4、図5の緯糸の繊維は図10の1/3程度の細さしかない。

リュウゼツランの葉は成長すると2mを超えるが、大きなリュウゼツランの葉の繊維は太くて堅い。図4、図5がリュウゼツランの葉の繊維なら、おそらく反物の横幅約40cmを超えた当たりで刈り取り、繊維を取り出して使用したのではないだろうかと思われる³⁵。実際、手持ちの1m程度に伸びたリュウゼツランの繊維を顕微鏡で見ると、図10の真ん中辺りの緯糸（繊維）とほぼ同じ太さである。今後、細い繊維の取得を試みてご報告できればと考えている。

4. リュウゼツラン繊維取得の困難さ

リュウゼツランから取れる繊維は、白く、絹のように光沢がある。ただ、その繊維の沖縄県内での取得方法は、一ヶ月ほど砂浜に埋める、ドブに沈めてころあいを見て取り出すなど、古い言い伝えが示すように独特な方法である。それはリュウゼツランの葉肉を腐敗させて繊維を取り出す際に、ひどい悪臭（糞尿臭）を放つからで、それが砂浜やドブに沈める必要があったのであろうと考えることができる。

しかしながら、現代の世の中では、砂浜に糞尿臭のするものを埋めることはできないし、住宅街では下水道がほぼ完備されているので、ドブを探すことも、仮にドブがあったとしてもそこに漬けて腐敗臭を放ったまま数日間放置することも難しい。さらに厄介なことは、そのリュウゼツランの腐敗液が皮膚につくと、石鹼で洗ってもその糞尿の匂いが数日間落ちないことである。

35 下地テルさんは、伸びた葉の下部分は繊維が太いので、そこを切り落として使ったということであった。繊維の柔らかくて細いものを選んで使っていたことが分かる。

そのため、現実的な問題として、伝統的な方法でリュウゼツランの葉からその繊維を取り出して利用することは難しい。

また、著者の個人的な経験だが、生のリュウゼツランの葉肉から飛散した液が付いた皮膚に、猛烈な痒みの後に自然治癒で十日ほどかかる発疹ができた事実もある。発疹の発症には個人差もあるようだが、これでは、積極的にリュウゼツランから繊維を得ようという気になれない。

本論文では、このような欠点を許容できる範囲の難易度、つまり、家庭でも2週間程でリュウゼツランの繊維を取り出す方法を紹介する。この手法のもう一つの特徴は、圧搾して繊維を取り出す方法でないため、繊維を痛めないことである。具体的な取り出し方について、工程を時系列で写真を用いて提示し、説明を加えていく。

また、この方法を用いれば月桃や虎の尾の繊維も取得できる。ただし、月桃の繊維を取得するには、リュウゼツランよりも細く柵状にし、かつ腐敗の進行を促すため、微生物の食料／栄養源となるものを多量に追加する必要がある。繊維取得にかかる日数は、微生物の食料や柵の状態によって変化すると思われるが、最低でも2～3カ月程度かかるであろう。

4.1 繊維の簡易取得法

はじめに、リュウゼツランの葉から繊維を取り出す手法を簡単に述べる。

4.2 簡易取得法

リュウゼツラン繊維の簡易取得法

- (1) 手や足など、肌が露出しないように工夫する。これは、リュウゼツランの葉を処理している際にその葉液が皮膚につくことで、炎症を起こす場合があるためである。第5.2節を参照された

い。

- (2) 葉の針を取り除く。
- (3) 縦に細く切り裂く。
- (4) 切り裂いた細い短冊から、透明な外皮と一緒に緑色の外皮も剥がす（調理器具のピーラーでも剥がせる）。
- (5) 剥がした外皮と内部の白い葉肉の部分を分けて取り扱う（緑色の外皮の繊維は、撚って糸にできると思われるが、手間がかかる）。
- (6) 葉の根、葉の先を揃えて水に沈め、腐敗を促すようにしないと、絡まりが生じて、繊維が取り出しにくくなる。これは自然に繊維が撚れる性質を持つためだと思われる。
- (7) 水に浸す。水には、ヨーグルトをたっぷりに入れておくことが良い。それは腐敗を促進させるとともに、いやな悪臭を抑える効果がある。ヨーグルトを入れないと、糞尿臭の強い腐敗液となる。ヨーグルトを入れるとチーズの臭いになる。また、空気を循環させることで（おそらく好気のパクテリアを活発にすると）、臭いが消えて行くことも確認した。

4.3 繊維取得の実践

以下に、リュウゼツランの繊維取得の実践過程を写真画像と共に示す。

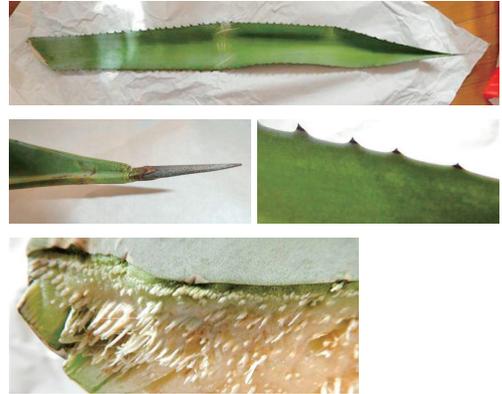


図11 1日目 原料

全長は120cmほど。トランクに入れて運んだため、真ん中で折曲がりがある。根元付近の古い葉である。古い葉を選んだ理由は、以前、若い葉から取得したトゥンビヤンの繊維が乳白色であったため、根元の古い葉の繊維は、透明なのではとの仮説を立てたため（実際は、同じ乳白色で、大きな葉は太い繊維も持つ）。

棘は、硬く、刺さりやすい。切り目に繊維が見えるが、太い繊維が、外側にもあることも分かる。



図12 1日目 引裂き

リュウゼツランの葉を繊維に沿って、縦方向に引き裂く。葉の根付からでも、葉の先からでも、切込みを入れれば、簡単に引き裂ける。引き裂かれた箇所繊維が現れる。



図13 1日目 短冊化

適当な幅で引き裂いて短冊にし、紐で縛って、軽く固定する。

短冊化は、葉の裂け目から腐敗を促す目的がある。ただ、葉の表面にビニールのような薄い透明の膜があり、この膜が腐敗の進行を妨げるので、予め除去することが望ましい。

この段階で、露出している腕や足の膝にもものすごい痒みが発生した。



図14 1日目 水に浸す

30cm×90cm位の長四角いポリ容器に水を入れ、束ねた葉を入れる。

この時点で、痒みは、とてつもなくひどく、水洗いでは引かない。そこで、熱いシャワーを肌にかけて、汗腺を開き、汗が出てくるようにして洗い続けた結果、やっと痒みが収まってきた。



図15 1日目 残り物

リュウゼツランの葉を裂いたときに出た余分な繊維。経過観察のため、そのまま放置する。

結果的に、葉肉が綺麗に落ちていないため、葉肉が茶色く変色し、繊維も白く艶のある綺麗な繊維とならない。



図16 浸けて18時間後

一晩、水につけて寝かすと、水にやや白濁が現れる。臭い匂いは無い。



図17 浸けて25時間後（約1日）

白濁が増えた。臭い匂いは無い。

発酵を促すため、スーパーで購入してきたブルガリア・ヨーグルトを山盛りで大匙2加え、ヨーグルトを細くなるまで攪拌する。少々、ヨーグルトの甘い匂いがある。



図18 浸けて50時間後（約2日）

水の白濁が進み、ヨーグルトの匂いが強い。悪臭は無い。綺麗で透明な繊維が現れる。発酵によって葉肉が取れたようである。

ヨーグルトに含まれる微生物によって、葉肉が分解され、脱色が促されたのだろう。中国の桐板は、牛糞を使って脱色する（文献[13-14]）。リュウゼツランの繊維は乾燥すると乳白色。



図19 浸けて93時間後（約3日）

発酵が進んできた。侵液は薄い緑色。ヨーグルトの匂いに混じり、やや糞尿臭も出てきた。葉の付け根部分の太い箇所は、未だ腐敗が進んでない。また、ビニール状の外皮は腐らないので、先にこれを剥がす必要がある。

不用意に腐敗液に素手を突っ込んだため、ひどい糞尿の臭いが指・手全体に沁みついた。石鹸で何度洗っても臭さは取れない。消毒用アルコールで洗っても取れない。



図20 浸けて140時間後（約6日）

腐敗が進んできた。侵液は、白く濁った緑色。匂いは、前日に追加したヨーグルトにより、糞尿の匂いよりは、ヨーグルトの匂いが強い。ヨーグルトを入れることで、臭い腐敗が抑えられている。

この日以降、ヨーグルトを適宜追加することにした。また、嫌気と好気のバクテリアのどれが異臭を作るのかわからなかったので、繊維が絡まないように気を使いながら、空気を循環させるように浸液を攪拌した。その結

果、この日以降、悪臭はほとんど無く、匂いはチーズに近いものとなった。また、適宜、水も追加した。



図21 185時間後（約8日）

葉の根元の太いところも、腐食により繊維が分離し始める。

繊維は、細いものから太いものまで見える。緑色の葉肉にあるのは、かなり細い透明の繊維。内部に行けば行くほど、白く太い繊維に見える。



図22 浸けて232時間後（約9.5日）

蓋を開けたときの糞尿臭は僅かである。匂いを嗅いでみると、チーズ臭である。ヨーグルト臭は僅か。

ビニール状の外皮付近は腐敗し難い。一方、裂いて内部が露になった所は腐敗し、繊維の分離が進んでいる。



図23 浸けて280時間後（約11.5日）

ほとんどの葉肉は落ちたが、わずかに腐敗した葉肉が残っている。指で押すと、葉肉が崩れ落ちるので、腐敗した葉肉に手のひらや指で圧をかけて除去した。一方、表面のビニール状の外皮を残したままの葉の先端部分は、まだ生きている。外皮を除去、あるいは外皮に切れ目を入れておくことは、迅速に繊維を取るために必須である。



図24 浸けて328時間後（約13.5日）

腐敗した葉肉が無くなり、かなり軽い。ほぼ繊維だけとなっている。入念に指で圧を加えた効果がでた。あと1日で繊維が取り出せるであろう。

繊維は白いが、透明感もある。上質の繊維が、一枚の葉から多く取れると思われ、おそらく苧麻茎の10～15本分に相当すると思われる。



図25 浸けて378時間（約15.5日）

ほぼ、葉肉が取れた。チーズ臭があるが、ほとんど気にならない。

緑色とビニール状の外皮が見えるが、これら外皮は、水に浸ける前に除去するべきであることを強くいたい。



図26 外皮の除去

外皮を取り除く。とても手間の要る作業。もろくなった外皮は、破片になって繊維に絡み付くので、除去に手間と時間がかかる。



図27 得られた繊維

残った葉肉や外皮を丁寧に除去。



図28 漂白

3分程度、熱い水酸化ナトリウム溶液のお湯で漂白してみた。葉緑素が取れて、全体に白っぽくなってきた。

水酸化ナトリウムの濃度や湯通しの時間は、リュウゼツランの繊維を痛めないためにも、いろいろ経験を積む必要がある。

緑色の表皮部分には、非常に細い繊維があり、撚れば利用できるかもしれないが手間が掛かる。緑色の表皮部分は、ビニール状の外皮と一緒に先に除去すべきであろう。



図29 第2回目の漂白

水酸化ナトリウムのお湯で、不要な葉緑素や外皮を取り除く。やや君が残る物の非常につやと張りのある、上質の繊維が取れた。

ただ、漂白は繊維を痛めてしまうので、最初に葉緑素を含んだ外皮を取り除けば、余分な漂白は無用となる。

4.4 注意事項

個人差があると思われるのだが、リュウゼツランの葉液が皮膚につくと猛烈な痒みに襲われる。その後、全治10ほどかかる小さな水ぶくれができる(図23参照)。

痒みのあった箇所に、発疹ができた。初めのうち、特に痒みがなかったので、薬などを用いていなかったが、気がつくると発疹の先端に水ぶくれが出始めた。触れると強いかゆみを覚える。このときになって、喜宝院の上勢頭芳徳さんが、トゥンビャンは毒だから、ヤギなどの家畜に食べさせないといっていたのを思い出した。そして、南嶋民俗資料館の崎原毅さんが、リュウゼツ



図30 発疹

痒みのあった箇所に、発疹ができた。初めのうち、特に痒みがなかったので、薬などを用いていなかったが、気がつくると発疹の先端に水ぶくれが出始めた。触れると強いかゆみを覚える。このときになって、喜宝院の上勢頭芳徳さんが、トゥンビャンは毒だから、ヤギなどの家畜に食べさせないといっていたのを思い出した。そして、南嶋民俗資料館の崎原毅さんが、リュウゼツランの繊維を取るときに、ひどい痒みと発疹がでたと言っていたのを思い出した。

初日から5日間ほど痒みが継続し、炎症が目立たなくなるには10日ほど要した。

ランの繊維を取るときに、ひどい痒みと発疹がでたと言っていたのを思い出した。

初日から5日間ほど痒みが継続し、炎症が目立たなくなるには10日ほど要した。

4.5 繊維での織り（文献 [16] から抜粋し、加除）

リュウゼツランの葉より得られた繊維を用いて約10cm 幅の“幻の布”を織ろうと試みたのだが、経糸が頻繁に切れて織りそのものができなかった。その際に気づいたリュウゼツランの繊維の特徴を後学のために挙げる。

- (1) 葉の付け根の方の繊維は太く、葉先に向かって細くなる。
- (2) 一枚の葉から取れる繊維は、長さ、太さが様々である（例：太くても短いものもある）。
- (3) 取り出した繊維を束ねて置くと、自然に撚り合わさり縄のようになる。
- (4) 太い繊維が切れ難いわけでもない。細かい繊維でも切れ難いものもある。
- (5) 数本に一本の割合で、非常に切れやすい繊維が現れる（これが曲者）。
- (6) 繊維が縦に裂け難いため、宮古上布や八重山上布のような撚り継ぎによる糸の制作は非常に難しい。

正直に言えば、機に経糸を掛けている最中から糸が切れることが多く、時間の都合もあったので、実質、一日で断念した。リュウゼツランの繊維での織りは、おそらく若い葉の柔軟な繊維でなければ織れないのだろうと思っている。

また、織りを断念した際に思い起こされたのが、河原田盛美の『琉球備忘録』（1875年）の「朱綾」と「紹織布」の説明にある、緯糸に桐板を用いるという点であった。まさに、理にかなった利用法なのだと思

きた。また、琉球織物同業組合事務所の広告（明治33年11月5日、琉球新報。文献 [2]、p.55）にあった、一反分の経の長さが約114cm（三尺）短くてもよいという酌量についても当然の条件緩和なのだと思いに至った。

2つの文献とも「桐板」の文字を用いるが、緯糸への利用、ならびに経糸への利用に対する条件緩和を考えると、両文献が指している「桐板」はリュウゼツランの繊維なのではないだろうかとの考えも浮かぶ。実際、図8の裂は、緯糸にリュウゼツランの繊維の束を用いている。

4.6 繊維の染色

実験として、藍と人工の化学染料を用いてリュウゼツランの繊維を染めた例を図31に示す（リュウゼツランの繊維が滑りやすいので、台座として木綿糸を巻いてある）。染料は、田中直染料店のシリアス染料である。藍とシリアス染料は、リュウゼツランの繊維と相性がいいのであろう、容易に染色ができた。



図31 無色、藍、シリアス染料×2

5. サンニンとトゥラヌージュの繊維

本論文で紹介した方法は、サンニン（月桃）やトゥラヌージュ（虎の尾：サンスペリア）の繊維を取る際にも有効である。ただし、取得にかかる時間は少なくとも5倍

以上かかる場合もある。サンニンの繊維を取り出す際の腐敗液は、サンニンの良い香りを残すので、リュウゼツランのような不快さを感じない。トゥラヌウジューの繊維を取り出すときも、さほど腐敗臭はきつくなかった。

ところで、サンニンの繊維は乾燥すると折れやすくて得にくいとされるが、提案の方法では繊維を傷つけることなく取り出せ、乾燥すると折れやすい欠点も幾分減ったように感じる。

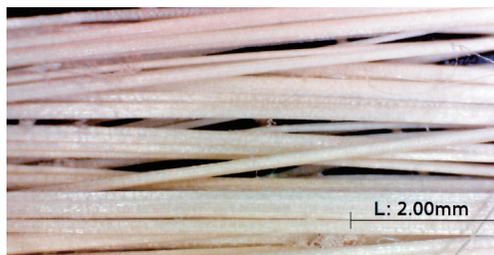


図32 サンニンの繊維

図32は取り出したサンニンの繊維である。デジタル顕微鏡画像を見ると、リュウゼツランの繊維に近い風合いがあるが、より光沢がある。また、繊維はより丸みを帯びていることが分かる。

図33はトゥラヌウジューの繊維の顕微鏡写真である。トゥラヌウジューの繊維は、リュウゼツランやサンニンの繊維よりも細く、柔軟性があり、かつ明らかに強靱であった。1m程の一枚の葉からでも多量に取れるので、織物に最適かもしれない。し

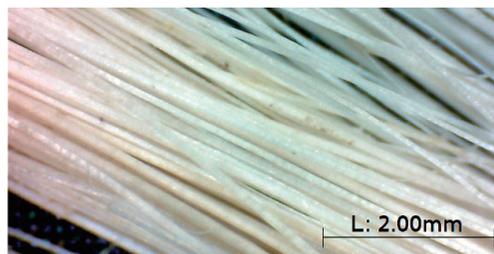


図33 トゥラヌウジューの繊維

かも、自宅で観葉植物として簡単に栽培できる利点もある。

6. まとめ

本論文では、幻の布と呼ばれたトゥンビャン（桐板）布の原料が、リュウゼツランではないことを戦前の絵葉書や各地域の植物の方言などから示した。すなわち、トゥンビャン（桐板）は中国から輸入された麻系の繊維の糸であり、一方のリュウゼツランはトープ（唐苧）である可能性が高いことを示した。

トゥンビャンがリュウゼツランの繊維であるとの混乱が始まったのは、1952年出版の『沖縄織物裂地の研究』（田中俊雄著）からで、それを追従するように沖縄の祖国復帰運動の時期に書かれた沖縄の染織関係の書籍がそれに輪をかけ、その後の論文（著者の論文も含む）も誤った見解を持つに至っていた。著者の論文等に関しては、この場を借りて訂正をしておきたい。

田中の書が混乱の引き金ではあったが、リュウゼツランの繊維で織るという技法、ならびに布そのものを現代に残すことに貢献したことは敢えて付記したい。また、それによってトゥンビャン（桐板）布に対する様々な角度からの研究がなされてきたのも事実で、著者の場合だと、古い4つのリュウゼツランの繊維と酷似した、まさに“幻の”繊維で織られた布や裂を発見することもできた。そしてリュウゼツランの繊維をトープ（唐苧）やトープアダン（唐阿檀）と呼ばれていた可能性が高いことも示せた。

一方、伝統的な手法でリュウゼツランの繊維を取るのには現在の世の中では難しいことから、新しい手法を提案した。それを用いれば、サンニン（月桃）やトゥラヌウジュー（サンスベリア）の繊維も傷めずに

取得できる。染織家の方々をはじめ、工芸に携わる方々の手助けになれば幸いである。

ところで、研究を通して理解したもう一つのことについて述べておきたい。それは、沖縄の地域で使われてきた名称、すなわち方言の消失という現実である。ゴーヤはニガウリ（苦瓜）から逃げ切って名を残したが、ロウガイ（蘆薈）は消え去り、もはやアロエとなっている。2021年で70～80代以上の方々がロウガイ（蘆薈）の名を知っているぐらいであろう。著者としては、様々な琉球王朝時代の研究を通して知り得た地域の言葉は、今まで以上に積極的に論文の中で使っていきたいと考えている。

最後に、今後は、発見した“幻の”布と呼べるものが、本当にリュウゼツランの繊維で織られたものか否かを実際に同じ手法で織って、その質感を見比べてみたいと思っている。

投稿受付日：2021/4/23

投稿採録日：2021/9/13

謝辞

本研究は、文部科学省研究助成費（16K02101）によって行われた調査の成果の一つである。ここに謝意を述べたい。つづいて、古布の調査を快諾して頂いた石垣市立八重山博物館、石垣市立伝統工芸館、私設の南嶋民俗資料館の崎原毅館長、さらには与那国島と宮古島の染織家の方々に御礼を述べたい。特に宮古島の下地テルさんには、御自身がリュウゼツランの繊維で織られた衣装ならびに端切れを著者の元まで送って下さったことに対して、ここに深く御礼申し上げたい。また、地域の方言による名称についてご教授を頂いた方々、特に天野鉄夫の『琉球列島 植物方言集』の存在を著者に教えてくれた前原武光さんに感

謝の意を表したいと思う。

参考文献

- [1] 檜原翠邦編、『沖縄県人事録』、現代人物之部、オ之部、p.130、1916.
- [2] 沖縄懸教育会同人、『琉球』、小澤朝蔵、1925.10.20.
- [3] 那覇市企画部市史編集室、『「那覇の民俗」付図 那覇の歴史民俗地図（5葉） 旧那覇地図』、那覇市企画部市史編集室、第2巻中の7、1979.1.
- [4] Matthew Calbraith Perry, 『Narrative of the Expedition to the China Seas and Japan』、D. Appleton and company、p.156,1857.
- [5] 多和田真淳、「桐板（トゥンビヤン）とは何か - その調査追跡報告（予報） -」、沖縄文化研究、法政大学、pp.135-163、1974.6.
- [6] 加治工真市、『鳩間方言辞典』、pp.1807-1808、2020.3.
- [7] 国立国語研究所 編集、『沖縄語辞典』、大蔵省印刷局、第8刷、p.449、1998.3.
- [8] 朱淑媛、「清代琉球国難民救助考」、歴代宝案研究、沖縄県立図書館、第6・7合併号、pp.1-19、1996.3.
- [9] 中国第一歴史檔案館編、『中琉歴史関係檔案』、乾隆朝（十一）、中国檔案出版社、2010.3.
- [10] 『沖縄大百科事典 中巻 ケ～ト』、沖縄タイムス社、p.783、1983.5.
- [11] 谷川健一、『日本庶民生活資料集成 第二十七巻 三国交流誌』、三一書房、pp.453-458、1981.11.
- [12] 原田禹雄、『訳注 質問本草』、榕樹書林、2002.2.
- [13] ルバース・ミヤヒラ吟子、「桐板に関する調査研究（その1）」、沖縄県立

- 芸術大学紀要 2、pp. 1 -21、1994.3.
- [14] ルバース・ミヤヒラ吟子・高漢玉・春木雅寛、“桐板に関する調査研究(その2)”, 沖縄県立芸術大学紀要 3、pp. 27-44、1995.3.
- [15] 米村創、“沖縄で製作されたトゥンビャンという龍舌蘭繊維の織物”, 日本民族学269号、pp.67-83、2012.2.
- [16] 又吉 光邦、“沖縄の龍舌蘭の繊維「トゥンビャン」”, 産業情報論集、Vol.15、1・2合併号、pp.45-60、2019.3.
- [17] “沖縄県史 資料5 染織関係近代新聞資料”, 沖縄県教育委員会。
- [18] 天野鉄夫、『琉球列島 植物方言集』、新星図書出版、p.207-208、1979.6.
- [19] 田中俊雄・田中玲子、『沖縄織物の研究』、紫紅社、1976.2.
- [20] 日本織物新聞社編纂部編纂、『染織辞典』、復刻版、京都書院、1974.
- [21] 佐喜真興英、『女人政治考・霊の島々〈佐喜真興英全集〉』、新泉社、1982.12.
- [22] 『民藝 田中俊雄と沖縄の織物』、810号、2020.6.
- [23] 小野武夫編、『琉球産業制度史料 前編 第一巻土地制度』、近世地方経済史料、第九巻、吉川弘文館、pp.40-41、1969.11.
- [24] 富山弘基・大野力、『沖縄の伝統染織』、徳間書店、pp.96-99、1971.1.
- [25] 前新透(波照間永吉、高嶺方祐、入黒照男 編著)、『竹富方言辞典』、南山舎、p.719、2011.2.
- [26] 長田須磨・須山名保子、『奄美方言分類辞典 上巻』、笠間書院、pp.824-825、1981.6.
- [27] 宮里正子、「雍正十四年 納殿染賃例 大美御殿について」、那覇市歴史博物館紀要、第1号、pp.21-36、2009.3.
- [28] 先田光演 編著、“与論島の古文書を
読む”、南方新社、2012.12.
- [29] 桑江克英訳注、『球陽』、三一書房、1971.7.
- [30] 小野武夫編、『琉球産業制度史料 前編 第一巻土地制度』、近世地方経済史料、第九巻、吉川弘文館、pp.16-17、1969.11.
- [31] 石垣市総務部市史編集室、『石垣市史叢書 3 富川親方八重山島諸村公事帳』、石垣市役所、1992.3.
- [32] 沖縄タイムス(夕刊)、「下地さんのトゥンビャン」、1982.4.30.

